

「父親と二人の息子」

ルカによる福音書15章11～

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。

12弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。

17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』

20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。

ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』

22しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』

28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』

31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。』

祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

有名な「放蕩息子」のたとえです。弟息子は父親から財産を分けてもらい、さっさとお金に替えて遠い国に旅立ち、そこで放蕩三昧、身を持ち崩し、本当にみじめな状況の中で父親のことをを思い出し、家に戻る決意を固め、戻っていきました。

一方、兄のほうは家で働き、勤勉さについては、おそらく周囲の人たちの評判だったかもしれませんが、弟の帰宅を歓迎できず、外でむくれています。

この描写は、この章の最初の部分を読めば、背景として何があるのかわかります。イエス様のところに集まり、話を聞き、食事とともにする「罪人と呼ばれ、社会的に身分の低い人達」と「イエス様がそれらの人たちと食事をしているのを妬み、怒り、あいつらと一緒に食事までしてけしからん奴だ」と文句を言っている当時の社会のエリート集団、宗教指導者たちの姿がそこには書かれています。

わたしは今朝は、これらの人たちの話というより、つまり放蕩息子たちのすがたではなく、ここに描かれている父親の姿に焦点を絞りたいと思います。

そこにはイエス様の心が見えるからです。そこには神さまの愛と、その態度が教えられているからです。

父親の態度、言葉が何箇所か出てきます。

これらの箇所をゆっくり読んで、あなたは何を感じますか？

すごいな、うれしいな、ありがたいなと感じる部分はありますか？

父親の態度と言葉をゆっくり読んで、感じ取ってみてください。

牧師の説明ではなく、聖書の言葉があなたに何を感ぜさせてくれていますか？

あなたは、この父親とどういう関係を持ちたいですか？

1) それで、父親は財産を二人に分けてやった

2) ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

3) 『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。 23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。 24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

4) 『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。 32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

全体の物語をゆっくり読み返して、全体の流れを理解し、そこからあなたの心に

あふれてくる「なにか」を感じ取ってみてください。

あえて付け加えさせてください。

この物語を通して、イエス様は何を教えようとしておられるのでしょうか。

思うに、まずは、弟息子、兄息子の姿を連想させ、そのあとで

父親の姿を鮮明に表現して、「この父親との関係」を大切にしようと言う部分と、それぞれ、目指すべきは、この父親の心を自分の心と重ねて、父親の心を自分の中に育てつつ生きなさいということだと思えます。

素晴らしいお父さんですね、めでたし、めでたし、という話ではなく、ここに神の私達に対する愛がある、そしてその愛を受けたら、この愛の提供者の心を自分の中に育てながら生きなさいということが中心的なテーマなのだと思います。

それは100匹のうちの一匹を必死に探す羊飼いの姿でもあり、10枚のセットの銀貨のうち一枚が失くなったのを必死で探す女性の姿でもあります。

この姿勢を自分の中に育てつつ生きることが重要なのです。

神を愛し、人を愛しつつ生きるというのは、そういうことです。

MACF礼拝映像はこちらです

<https://youtu.be/rf8PB54XVOo>